子供とともに，教師も主体的に学ぶ校内研究を目指して
― 校内研究のあり方を考える ―

宮城県大崎市立川渡小学校
校 長　八巻 秀

1 主題設定の理由

令和４年度までの国語科での３年間の校内研究をまとめ，令和５年度からは新たな研究主題を設定して校内研究を行うことにした。また，児童数の減少等から本校は同じ中学校区の小学校３校，中学校１校の計４校を統合し，令和７年度から義務教育学校として新たに開校することが決定している。そのため，令和４年度末の研究全体会で，統合も見据えた残りの２年間で，児童をどのように育てていきたいかを話し合った。その時に児童の実態（課題）として出されたのが以下の３点である。

・すぐに諦めてしまう
・自分で考えて行動することが苦手
・自信をもって自分の考えを表現できない

これらをもとに話合いを重ね，育てたい児童像を明らかにした上で設定した新しい研究主題及び視点が以下の通りである。

自ら学ぼうとする意欲をもち，粘り強く課題に取り組み，自信をもって表現する児童の育成 ―対話的・協働的な学びを通して―
【視点１】児童が主体的に取り組む指導の工夫
【視点２】ファシリテーションを活用した対話的，協働的な学習活動の工夫
【視点３】自信につなげるための自己評価，相互評価の工夫

子供にこのような姿を求める研究主題を設定したが，それを求めている教師がこのような姿で校内研究に臨めているだろうか，という視点で振り返ってみた時に，校内研究を行う教師側の課題も見えてきた。①協働での授業づくりが本当に教師全員の学びにつながっているのか，「授業を実践する」ということに対する土台を揃えて話合いができているか，②校内研究を教師の学びとして考えた際に，校内研究を通して学ぶ，学んだことを日々の実践に生かすということができているか，という点が挙げられた。

このようなことから，新研究では，研究主題に掲げたような児童の育成を図るだけでなく，教師自身も子供の姿に学び，育成したい子供の姿に見合った教師の姿になれるような校内研究を行っていくことが大切であると考え，本研究の主題を設定した。

2 研究の目標

自ら学ぼうとする意欲をもち，粘り強く課題に取り組み，自信をもって表現する児童を育成するために，子供とともに教師も学ぶ校内研究のあり方を明らかにする。

3 研究仮説

校内研究を研究授業の場として捉えるだけでなく，教師が学ぶ機会を得たり，子供の姿から学んだりする場としても捉えて研究を推進することで，教師も子供も学ぶ校内研究を実現させることができるだろう。

4 研究の方法

（1）ファシリテーションを軸とした全教科での研究
（2）まずは教師が学ぶ―外部講師からの学び―
（3）一人１授業の授業実践
（4）事後検討会の工夫と教師自身の振り返り
（5）校内研究を支える環境づくり

5 研究の内容

（1）ファシリテーションを軸とした全教科を対象とした授業研究

「（教師が）どのように教えるか」という指導法や指導技術の研究ではなく，「（子供が）どうやって学ぶのか」という視点の転換が求められている。研究教科を限定し，その指導法を研究することは，深くじっくりとその教科について学びを深められるという意味で有意義である。しかし，研究の日常化を図り，すべての教科で，どの教師もどの授業でも生かせる視点で研究を推進していけないだろうかと考え，ファシリテーションを一つの軸とすることにした。令和３年１月の中教審答申では「教師に求められる資質・能力」の一つに「ファシリテーション能力」が明記されている。ファシリテーションには様々な定義があるが，本校では「子供たちの学びを促進する技術」と捉え，それぞれの教科での子供の学びを促進するための手立てを探っている。それぞれの教師は研究授業を実践する際に，何の教科で授業をするかを考えるところからスタートする。授業実践

する教科を考えるという時点で授業研究に主体的に取り組むことになるとともに，自分の得意な教科での授業実践を行うことが可能であるため，「やらされる研究授業」から一歩踏み出すことになる。また，それぞれの教師が研究授業を実践する教科は異なっても，ファシリテーションという軸があることで，同じ土俵に立って授業についての対話を深めることが可能である。

（2）まずは教師が学ぶ―外部講師からの学び―

校内研究には大きく分けて授業研究と現職教育からの学びがあるが，これらを有機的に結び付け，学ぶことと実践することを往還しながら教師自身の学びを構築していく場として校内研究を捉えた。

答申に「ファシリテーション能力」と示されているが，具体的な方法について学ぶ機会はそう多くはない。そこで，校内研究を教師自身が学ぶ場として機能させ，学んだことを即子供たちの学びに還元していけるようにと考えた。

教職員全員で研修を受けられるようにするために，様々な分野でファシリテーション技術の普及に取り組む，ファシリテーターのちょんせいこ氏を校内研究の講師として招くこととした。講師を招いた日は，丸１日を使って，①ファシリテーションについての示範授業（低学年部，中学年部，高学年部の３本の授業）で，子供たちが講師から直接学びを得るとともに教師もファシリテーションについて学ぶ，②校内研究授業を行い，事後検討会をファシリテートしてもらうとともに，授業へのフィードバックをもらう，③教員研修でファシリテーションについて学ぶという３つの形態で学びを深めている。（４月，６月，９月の年３回）

この研修を通して，教師も子供たちと並行して子供たちと同じように，一緒にファシリテーション技術を学んでいる。ちょん氏はホワイトボードを活用して進める話合いの手法であるホワイトボード・ミーティング®の開発者であり，本年度は主に，このホワイトボード・ミーティング®を通してファシリテーションについて学んでいる。教師が「学び手」となることで自信をもって指導に当たれるだけでなく，学び手としての子供たちの立場や気持ちを理解することにもつながっていると感じる。

（3）一人１授業の授業実践

昨年度までは学年部で一つ，年間３本の授業を全校研究授業として実践していた。このことで一つ一つの授業に注力し，協働で深い教材研究を行うことができた。しかし授業数が限られることで，成果と課題が見いだしにくかったり，授業づくりに対する温度差が見られたりもした。

実際，多忙な学校現場の毎日では，校内研究に掛けられる時間は限られているが，もともと教師がもつ学ぶことへのモチベーションに応え，やるのであればみんなが「やってよかった」と思えるやり甲斐のある校内研究にしたい。事前事後検討会のもち方を工夫して負担感を減らしながらもそれぞれの学びがある研究授業にする挑戦として今年度は一人１授業を実践することとした。

・授業実践例①第１学年生活科「なつがやってきた」

夏の自然を生かして遊ぶことの楽しさに気付くことができるようにするというねらいで授業を行った。初めに，前時までの活動写真をスライドショーで振り返った後，おすすめの遊びをペアで聴き合い，みんなに紹介するという流れの授業であった。おすすめの遊びをペアで聴き合う活動では，ホワイトボード・ミーティング®質問の技カードに書かれたオープンクエスチョンを使ってお互いの考えを聴き合った。

子供たちは１年生ながら，オープンクエスチョンを使うことで，お互いに話の内容を深めながら様々なペアで穏やかに話を聴き合うことができた。

・授業実践例②６年・国語科

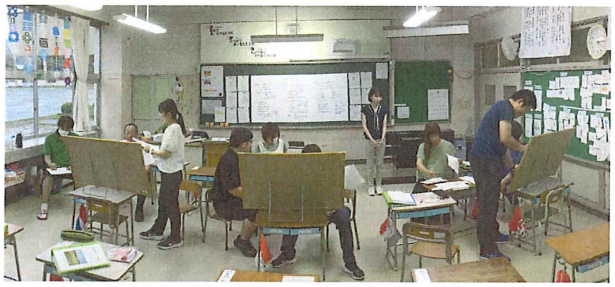
「友達の意見を聞いて考えよう」

友達と意見を聞き合って，共通点や相違点などを見つけ出すことができるというねらいで授業を行った。初めに，前時に書いた，新聞，テレビ，インターネットの３つのメディアに対する考えを振り返り，本時は友達と意見交流することで新しい観点を見つけるという課題を確認した。その後，選んだメディアとその理由等について，「質問の技」を活用して話を深めながら聴き合った。最後に，友達の意見を聞くことで，どのように考えが深まったかを振り返るという流れで授業を行った。

事後検討会では，質問の技で質問するという縛りがあることで，自分が聞きたいことが質問できなかったのではないかという意見が出された一方，質問の技の活用という手立てがあることで，普段はペアでの話合いでもほとんど話をしない児童も笑顔を見せながら対話をする様子が見られたという成果も挙げられた。

（４）事後検討会の工夫と教師自身の振り返り

昨年度までの事後検討会は，授業者が自評を述べた後，参観者が視点ごとの成果と課題，改善策を付箋に記入し，それをグループで持ち寄って模造紙に貼りながら意見をまとめるという形式で行っていた。本年度は４月のちょん氏の研修で学んだ，ホワイトボード・ミーティング®の手法を活用した事後検討会のもち方をその後も継続して行っている。



①授業者の振り返り

ファシリテーターが授業者に質問をし，話を聴きながら，授業者の話したことをホワイトボードに書いていく。授業者はそれを見ながら成果と課題，これから取り組んでいきたいことを振り返る。

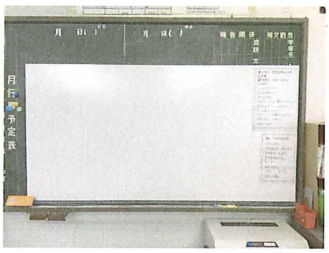
②視点ごとにグルーピングをしての話合い

参観者から観た成果と課題，これから取り組んでいきたいことを視点ごとにグループに分かれて明らかにする。ファシリテーターを交代しながら全員が発言し，またファシリテーターも全員が経験できるようにしている。

以上のように事後検討会を行っている。話し合う中身は毎回異なるが，毎回の事後検討会自体がファシリテーション技術の研修の場となっている。

（５）研究を支える環境づくり

教員研修で体験し，学んだことをそのまますぐに教室で実践できるように，新主題での校内研究を始めるにあたってミニホワイトボードとマーカーをセットで子供たちと教師に準備した。加えて，様々な振り返りに使えるように，Ｂ５版のノートを半分に切った小さなノートも全員に用意した。ノートは，教師が研修で学んだことを振り返る際に実際に使い，その後，子供たちとの実践でも同じように使う，というプロセスで導入した。



また，行事の前の計画を立てる時や授業づくりの相談をするときなどにみんなで集まって気軽に話し合えるようにするために，職員室後方の黒板を整備し，マグネットシートタイプのホワイトボードを常設した。ホワイトボードを常設することで，運動会前に学年部の種目について相談したり，授業づくりについて話し合ったりする際にもこれまで学んだファシリテーションの技術を活用し，日常的に話し合うという文化が芽生えてきた。

さらに，授業づくりやファシリテーションの参考文献を並べるコーナーも設置した。貸し出し可能な教員のための書籍コーナーは昨年度から設置していたが，本年度になってからは，授業づくりのために本を借用していく職員も出てきた。

６　研究の成果

・授業実践から見えた成果

子供の姿としての成果は前述した通りである。ここでは，教師の学びという視点からの成果を述べる。

実践例①第１学年生活科「なつがやってきた」

・多くの教師が「１年生でもあそこまでできるん

だ！」という振り返りをしていた。

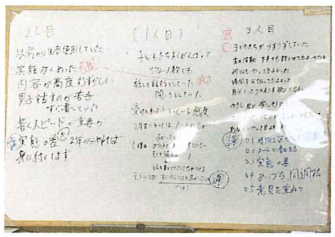
・授業者自身も「１年生でもこんなにできるんだ。１年生だから…と決めつけず，どんどん取り組ませていきたい。」と振り返っている。

教師自身が子供の学びと同じことを学び手として体験してみると，その良さも難しさも実感することができる。そうすることで自信をもって子供の前に立って実践を行うことができるため，普段なら「今の子供たちには難しいかもしれない」と考えて躊躇するようなことでも，一歩踏み出して実践することができたのではないかと考える。さらに，意欲をもって生き生きと対話をする子供たちの姿から，子供のもつ力の大きさを目の当たりにし，子供たちを信じて継続していこうと思えたことはとても大きな成果である。

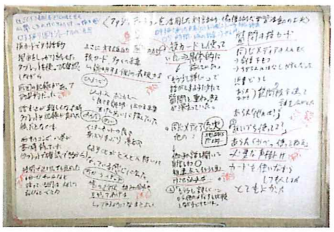
実践例②第６学年国語科

「友達の意見を聞いて考えよう」

・第３回目の校内研究授業であったが，第１回目に比べ，事後検討会での話合いが深まったことがホワイトボードを見比べることで明らかになった。



Before：
１回目の事後検討会



After：
３回目の事後検討会

「方法に習熟し，話す量，書ける量が増えることで，それに伴って話合いの中身も深まっていく」「続けていけばできるようになる」「話合うことの良さ，聴き合うことの価値」を実感でき，教師自身がそのような成長実感をもてることが子供たちへの授業実践にもつながっていくことが明らかになった。教師も学び手として子供たちと同じものを学ぶことの価値も実感された。

・その他の取組から見えた成果

校内研究を通してファシリテーションという共通言語を持ち，どの教科の授業に対しても同じ手立てで日々の実践を行うようになり，職員室では日々の実践や子供のことについて，うまくいったこともそうではないことも話をする機会が増えている。

授業実践数の増加により，事前検討会や事後検討会の回数も増え，教師の負担感が増しているのではないかと考えられた。しかし，ここまでの校内研究の振り返りを行った際に，（学年部を中心として行った）事前検討会を振り返り，若手の先生を中心に「全員参加にすると確かに負担は増えるかもしれないが，もっと他の先生の考えも聞いてみたい」という意見が出された。この発言から，ある程度の負担はあっても，子供，教師ともに成長実感のある取組は，意欲ややりがいにつながることが分かった。また一人一人に発言の機会があるということは校内研究を自分事として捉えることにもつながっているのではないかと考えられる。子供の実態を話合い，そこから「こんな子供に育てたい」という研究主題を設定したことで，教師にとっても必要感のある校内研究になってきたのではないか。また，必要感に見合った学びの場があり，即実践できる場があること，そしてそれを協働で振り返る事後検討会の場があることは，学び手としての教師の意欲に大きく影響を与えていると考えることができる。

初めはすぐに諦め，自分で考えて行動することが苦手，自分の考えを持って表現することに課題があると捉えていた子供たちが，生き生きと意欲的に学ぶ姿が見られ始めたことが，「子供たちには力がある，そして私たちにも力があると」と思わせてくれる一番のきっかけになったのだと考える。

７　今後の課題

研究授業で見られた意欲的に学ぶ子供の姿から，教師に求められているのは，主体的な子供たちを育てることではなく，本来主体的な子供たちがその主体性を思う存分発揮できる授業を実践していくことである。

研究全体会の話合いで「継続していったらもっともっとできるようになるよね」という声が多数聞かれた。今よりもっと良くなる未来が見えている。ただしそれは継続していくことが条件である。研究は始まったばかりではあるが，子供も教師も学びでの成長を実感している。その強みをもとに，教師も子供も一体になってこの取組を継続していきたい。

８　参考文献

・「話し合い活動ステップアッププラン―ホワイトボードで学級が変わる」ちょんせいこ（2014）

・「ちょんせいこのホワイトボード・ミーティング―クラスが落ち着く！！低学年にも効果抜群」ちょんせいこ（2015）